2023年12月17日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

死を身にまとう救い主

［イザヤ書25章1節～9節］

主よ、あなたはわたしの神／わたしはあなたをあがめ／御名に感謝をささげます。あなたは驚くべき計画を成就された／遠い昔からの揺るぎない真実をもって。
あなたは都を石塚とし／城壁のある町を瓦礫の山とし／異邦人の館を都から取り去られた。永久に都が建て直されることはないであろう。
それゆえ、強い民もあなたを敬い／暴虐な国々の都でも人々はあなたを恐れる。
まことに、あなたは弱い者の砦／苦難に遭う貧しい者の砦／豪雨を逃れる避け所／暑さを避ける陰となられる。暴虐な者の勢いは壁をたたく豪雨
乾ききった地の暑さのようだ。あなたは雲の陰が暑さを和らげるように／異邦人の騒ぎを鎮め／暴虐な者たちの歌声を低くされる。
万軍の主はこの山で祝宴を開き／すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。
主はこの山で／すべての民の顔を包んでいた布と／すべての国を覆っていた布を滅ぼし
死を永久に滅ぼしてくださる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい／御自分の民の恥を／地上からぬぐい去ってくださる。これは主が語られたことである。
その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってくださる。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。

[1]　暗闇の中の光

もう、あと一週間後には、クリスマス・イブを迎えますね。今日は待降節（アドベント）の第三週目の日曜日です。

主イエス・キリストがお生まれになったのが何月かはもう良く分からないそうです。もっと早い秋口であったのではないかと考える学者たちもいます。ただ、はっきりと聖書が語っていることは、主がお生まれになったのは、夜空に星が輝き、また羊飼いが夜通しの働きをしていた「夜」の出来事であったということです。ですから、クリスマスの光というのは“夜の中の光”と言うことが出来ます。太陽のような眩しく熱い光ではなく、私たちが目で見ることが出来るし、また私たちを拒むこともなく、むしろ私たちの闇の中に入り込んできてくれる光、それがクリスマスの光なのですね。そして、この光は意表を突くように訪れました。

旧約聖書の時代、ユダヤの国は、自分たちの国を再建してくれる誇らしいリーダーを待望していました。これは人間的な思いとしては当然でしょう。私たちも国がダメなのは政治家が、リーダーが悪いからだと思うことが少ないと思います。しかし、神様は、人間の真の救いはそのような、強い国として誇りを取り戻したり、経済的に豊かになってゆくということという外側の救いではなく、もっと、人間存在そのものの救いというものであると聖書は語っています。

今日は旧約聖書の「イザヤ書」の25章を開いています。ここはイザヤ書の中の「黙示録」とも言われるような、旧約の中でも、この世界だけでなく、「死を超えた世界」を語っている珍しい箇所です。「死」―これこそ、私たちにとって「闇」でなくて何でしょうか。「死」はいつも時代にとっても忌み嫌うもの、恐れるべきものの代表のように捉えられてきました。私も若い時、人間は結局は死んでしまうのだから、何をやっても虚しいのではないかと悩みました。その瞬間瞬間は楽しくても、全ては死の力に飲み込まれてしまうではないかと、とても虚無的な気持ちになっていた時がありました。

しかし、このイザヤ書をご覧下さい。「死」が人間を滅ぼすのではなく、主なるお方が「死」を滅ぼして下さる、と言うのです。25章1節から6節までは、どちらかというとユダヤの国を回復してくれる神を讃えています。捕囚の地バビロンから帰還した民の体験を、神様が備えて下さる祝宴の喜びとして預言しています。6節。「万軍の主はこの山で祝宴を開き／すべての民に良い肉と古い酒を供される。それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。」 まさに宴（うたげ）ですね。けれどもその祝宴というのは、単に生活が元通りになったということを喜び祝うということではないようです。

7～8節をお読みします。「主はこの山で／すべての民の顔を包んでいた布と／すべての国を覆っていた布を滅ぼし／死を永久に滅ぼしてくださる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい／御自分の民の恥を／地上からぬぐい去ってくださる。これは主が語られたことである。」

[2] 「死」に対する決定的な勝利の言葉

主なる神様の預言の言葉は、私たちの思いよりもずっと深いと言えます。「主は、死を永久に滅ぼしてくださる」と。「主はこの山で」とある「山」とは、神様が働かれ、臨在される聖なる場所です。新約聖書的に言えば、キリストがおられる所です。そこでは、「すべての民の顔を包んでいた布と／すべての国を覆っていた布を滅ぼ」される、つまり、神様とすべての人との間の覆いが取り除かれるというのですね。これもクリスマスの時のあの天使の言葉を想起させます。「恐れるな、わたしは民全体に与えられる大きな喜びを告げる」（ルカ2:10）とみ使いは羊飼いたちに語りました。「民全体に」と言いました。全世界の人々への宣言なんです。そしてこのイザヤ書の中では、全ての人間の「死を永久に滅ぼしてくださる」と言います。これは本当に驚くべきことです。皆さん、先ほど私のことを少しお話しましたが、「死」というものは、普通あまり考えたくないことです。しかしそれでも人間は、死を考える時がやはりありますよね。親しい者の死を経験したり、また戦争や災害と言った呻きや悲しみ、或いは人生の虚しさを突き詰めると「生とは？」「死とは？」と思うのが人間だと思うのです。まだ赤ちゃんや本当に幼い子供であったら、自分の死を考えるなどということはないと思うのですが、しかし大人になってきたら考えます。当然のことです。それは私は、人間存在には、もともと「死」が備わっている。そう、「死」があるからこそ人間であるとも言えると思います。そしてそれは自分という存在の「尊厳」と関わってくるのだと思うのです。死を考えることは、自分自身を深く見つめることに結びつきます。

黒澤明監督の『生きる』という映画をご覧になった方は多いのではないかと思います。主人公は一公務員です。早く勤務時間が終わることだけを気にしていた市民課課長の初老の男が、胃に癌ができ、どうも自分の余生は少ないということが判明した。初めは貯金をはたいて享楽に耽った。でも死が影を落とし、キャバレーみたいな場所に行っても、自分は「命短かし、恋せよ乙女」の歌を涙ながらに歌って周りが引いてしまう、そんな感じなんですが、ある女性の言葉がきっかけになって、「自分にはまだ出来ること、やり残したことがあるのでは」と、自分にとって生まれ変わり（第二のハッピーバースディ）を決心するんです。そして、これまで無視をしてきた子供たちのための公園建設の陳情書を蘇えらせてヤクザの脅しにもひるまずそれを通して公園を造り、雪の降る夜、その出来上がった公園のブランコを漕ぎながら、今度は違う思いで「命短かし、恋せよ乙女」を歌いながら最期を迎えるという内容でした。この主人公は志村喬という俳優で、その目の演技が凄いなぁと思いました。この男は、自分の中の「死」と向かい合うことで新たに生き直したのです。「死」から「生」を逆算したのです。では、今私は何が出来るのかと。健康よりもお金よりも大事なものは何なのかと。

私はクリスチャンになった今も「死」が何であるのかは良く分かりません。まあ、神学的に言えばそれは「罪が支払う代価」なのでしょう。「罪人」だから「死」が与えられている、その通りなのでしょう。しかし、キリストを信じている今、私は思うのです。すべての命は祝福されて生まれてきていると思います。神様は、結局はただ滅んでいくだけの人間を、理由もなく創造するだろうかと思います。旧約の申命記などを読んでいても主は「あなたはいのちを選べ」と招いています。「呪い」（これは結局は自分を選ぶ自己中心ですね）を選ぶな、と言っていますから、神様の思いは、人間の受容なんです。人間を丸ごと抱きかかえていらっしゃるのです！それがいちばんハッキリした日がクリスマスなのだと思います。何故なら、神様自らが、限界ある、肉体をもった存在にがなられたのが、あの飼い葉桶の主イエスの誕生だからです。主イエス・キリストが、人間の姿をお取りになられたということは、私たちと同じ様に、死ぬことが出来る存在になられた、ということです。主はそこまで私たちと連帯されています。飼い葉桶で産声をあげた幼な子は、既に「死」をまとっているのですね。私たち以上に「死」が何であるのかを知っておられるお方が、私たちに先んじで死を経験して下さる、いや、下さったのです！飼い葉桶と十字架とは神様の側でリンクしているのです。そして、私たちの滅びの死を突き破って下さった。そのことも私たちはイースターの出来事を通しても知らされています。イザヤがこの25章で預言している通りです。

「（神は）死を永久に滅ぼしてくださる。主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい／御自分の民の恥を／地上からぬぐい去ってくださる」。これは聖書の中で、死に対する神様による決定的な勝利について語られた最初のものであると言われています。「これは主が語られたことである。その日には、人は言う。見よ、この方こそわたしたちの神。わたしたちは待ち望んでいた。この方がわたしたちを救ってくださる。この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。」

この中で、「その日には」と言います。私たちはその日を知りました。クリスマスですね。それを知った者は生き方が変わる筈です。映画『生きる』の主人公は、「もう自分には時間がない、人を憎んでいる時間はないのだよ」と語っていました。何かガツーンとやられたような気がしました。自分にこだわることから私たちは少しずつ解放されてゆきたいなぁと思います。私たちは、救いに与ったこの命を感謝しながら、神様を賛美して生きて行きたいと思うのです。―「この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。その救いを祝って喜び躍ろう。」 お祈り致します。

主なる神様、あなたはこの肉体を持ち、欠けだらけの私たちを丸ごと抱き、愛して下さるお方でいらっしゃることを感謝致します。そしてあなたは、ご自分の御子の十字架によって、私たちの死を経験され、復活によって、死の滅び・呪いを木っ端みじんにして下さいました。そうであれば、私たちは自分からも解放されて歩んでまいりたいと思います。「わたしはいつもあなた方と共にいる」とおっしゃる主よ、どうか私たちをいつもあなたの導きに促し、隣人との関わりの中に一歩一歩進ませて下さい。病や試練の中にある者たちを慰め、強め、あなたの大きな手の中にある確信をますますお与え下さい。主イエスのお名前によって祈ります。アーメン。